

令和 8 年度 男女共同参画推進月間講演会

『脚本家 吉田恵里香さん講演会

わたしたちの物語は続く～「はて？」がつなぐバトン』

6 月 20 日（土）13：30～15：00 開催

オンデマンド配信 6 月 27 日（土）～7 月 10 日（金）

ソーレでは毎年 6 月の男女共同参画推進月間に合わせ、講演会を行っています。今回は、日本初の女性裁判官・三淵嘉子さんをモデルにした連続テレビ小説『虎に翼』の脚本を手がけた吉田恵里香さんを迎え、「はて？」という違和感を持つことの大切さや、現代にも残るジェンダーバイアス、誰もが自分らしく生きられる社会についてお話しいただきました。

#### 【講師紹介】

吉田 恵里香（よしだ えりか）

脚本家・小説家。1987 年生まれ、神奈川県出身。

連続テレビ小説『虎に翼』の脚本執筆により、第 51 回放送文化基金賞ドラマ部門最優秀賞ほかを受賞。

映画『ヒロイン失格』、ドラマ『30 歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい』『恋せぬふたり』、アニメ『ぼっち・ざ・ろっく！』など、映画・ドラマ・アニメと幅広いジャンルで数々の作品を手がける。

『虎に翼』は 2027 年に映画公開予定。

#### 【ナビゲーター】

中島 香織さん（弁護士／特定非営利活動法人 子どもシェルターおるき理事）

\*\*\*\*\*

中島 『虎に翼』での印象的なせりふ「はて？」は、どのように生まれたのでしょうか。

吉田 主人公が生きづらさや「おかしいな」「腹が立つな」と感じた時に「はて？」と言ってから、会話を始めることが多かったんです。見ている方にも、「こういうことは怒っていいんだ」「おかしいと思っていいんだ」と思ってもらう合図になれば嬉しいなと思っていました。また、「はて？」は相手に投げかける言葉であり、自問する言葉でもあるので、「対話しましょう」という合図にもなると思って使っていました。

中島 無表情でやり過ごす「スンツ」も印象的でした。

吉田 「スンツ」は、声を上げることが許されない社会の空気感のようなものを、なるべく軽い言葉で言えたらいいなと思って使いました。

中島 ドラマでは、同性同士は結婚できない、夫婦別姓が選択できない、といった今もまだ続く課題も描かれていましたね。

吉田 同性の方が法律上、夫婦になることができないことは、人権を描いた作品として必ず触れたいと思っていました。夫婦別姓もそうですが、今できていることができなくなるわけではなく、選択肢が増えるだけです。今はそれを選ばない人も、選択肢ができれば「選べる」ようになる。ドラマが再放送される頃には実現していればなと思います。

中島 女性裁判官である主人公が、マスコミに取材された時に料理を作って「良い母」を演じようとするシーンもありました。

吉田 文化や価値観は刷り込まれていくので、頭で分かっているけど、「良い母」像から外れた時に「ダメな母親」と思われることを恐れることはあると思います。刷り込まれたものはすぐにはなくならないし、全部を変えなければいけないわけでもない。いろんな曖昧さ、いろんな価値観を持つことが大事だと思っています。

中島 ソーレが行ったアンコンシャス・バイアス（性別による無意識の思い込み）の調査では「女性は料理ができなくてはならない」「男なら女性と結婚して子どもを作って一人前」など、性別による偏見を受けた経験が寄せられましたがいかがですか。

吉田 恐ろしい言葉ですね。家庭科が男女ともに必修となってから何十年もたっているし、この男性が異性恋愛者なのか恋愛をしたいかもわからない。

主語が「女」「男」のように大きいと、いろんな偏見や優劣を生み出します。説得力がある感じがするので、つい主語が大きくなりそうに私もなりますけど、気をつけています。

中島 仕事と家庭の「両立」についてはどのようにお考えでしょうか。

吉田 「両立」って難しいですね。仕事、子育て、趣味、資格の勉強、介護など、みんな何かしら両立しているのに、なぜか子育てだけ「両立」がすごく言われるし、それが当たり前になってるのがすごく嫌です。両立できない人が悪いみたいになりがちですが、みんな既に頑張っています。

中島 三淵嘉子さん（※日本初の女性弁護士の1人、女性判事、女性裁判所長）がモデルとなった経緯をお聞かせいただけますか。

吉田 最初はケア労働の話を書きたいと思っていました。第一線で働く人も、誰かのケアを受けたり、誰かが何かを犠牲にしてケアを担ったりしている。でも、表舞台に出ている人ばかりが注目され、ケアする側が注目されないことがある。そういうことを描きたかったんですが、モデルがいての半生記にも憧れがあり、三淵さんに決めました。埋もれてしまうかもしれない歴史を、今、伝える意味があると思いましたし、法曹界の方なので人権の話も描けると思いました。

中島 昔と今とで「社会が変わった」のは、変えたい、変えなければと声を上げた人が「変えてきた」からだと思います。今を生きる私たちができることは？

吉田 私たちは、誰かが成し遂げた、勝ち取った権利にフリーライドさせてもらっていると思います。それを申し訳なく思う必要はないけれど、その中で権利やいろんなことを広げていけているのかということ、なかなかそこまでいかない。だから今、何かで声を上げている人の言葉を、気に入らないと思っても、一回は耳を傾けることが大事だと思います。今すぐ効果が出なくても、声を上げたことは消えないし、それが未来に変わる一個の雨垂れになると信じています。

中島 ドラマでは憲法第14条平等権が取り上げられましたが、吉田さんが考える人権についてお聞かせください。

吉田 人権は、優しさや義務と引き換えにするものではなく、私たちが生まれた瞬間から持っている、誰にも侵害されてはいけない権利です。それは「自分らしく生きること」と言い換えられると思います。

自分らしく生きたいと思う人は、誰かに踏みつけられたり傷ついている人が多いと思うんですね。身分や経済的なことを抜きにしても、頑張れば頑張るだけ報われる社会にしたいと思っています。

（文中敬称略）

\*\*\*\*\*

